

傾聴ボランティアの臨床心理学的意義とその養成 [全文の要約]

著者	目黒 達哉
発行年	2018-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第684号
URL	http://doi.org/10.32286/00000233

博士論文要旨

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程

14D8510 目黒達哉

指導教員 串崎真志

【論題】 傾聴ボランティアの臨床心理学的意義とその養成

地域社会には支援を必要としている人々があり、さまざまな支援がある。例えば、高齢化社会における高齢者支援、児童虐待における子育て支援、震災・災害現場における被害者支援、教育現場におけるいじめ・不登校・発達障害の支援などである。こうした状況の中、臨床心理士などの専門家による伝統的な心理療法的関わりだけでなく、専門家がボランティアと協働・連携した支援のあり方が求められている。本論文では、傾聴ボランティアの養成と実践を例に、ボランティアする・されるという相互性に注目しつつ、その臨床心理学的意義を考察した。

第 1 章「臨床心理的地域援助とボランティア」では、臨床心理的地域援助を「臨床心理査定技法、臨床心理面接技法を包含しつつ、地域住民やボランティアの人々との協力、連携を図りながらクライアントの取り巻く家族、集団、組織、地域社会といった環境に働きかけて、クライアントの心の問題解決や成長・発展を促すこと」と定義し、その源泉であるコミュニティ心理学について概説した。次に、臨床心理的地域援助の技法を個人心理臨床と比較し、前者においては非専門家（ボランティア）の協力が不可欠であることを強調した。さらに、ボランティアとカウンセリングの相違を検討し、「動機」「人間関係」「コミュニケーション」「傾聴」「受容」「共感」「守秘義務」といった共通点を指摘した。そして、ボランティアの養成を支える理論として、実際の行動学というモデルを提示した。これは、(1)ボランティア自身の動機や目的を明確にし、(2)ボランティア活動の結果が（社会貢献だけでなく）自分自身の夢（ヴィジョン）・喜び・達成感につながることをふりかえり、(3)ボランティア自身の内的な葛藤（戸惑い、迷い、悩み）を昇華することで、ボランティア自身が自己成長へ向かうというモデルであった。筆者はこれをモデルとして、ボランティアを養成してきた。

第 2 章「事例研究 臨床心理的地域援助におけるボランティアの役割」では、不登校生徒の事例研究を通して、臨床心理士とボランティアの協働・連携による支援のあり方を考察した。事例の不登校生徒は、当初ボランティアされる側であったが、社会人や学生のボランティアのかかわりによって、やがてボランティアをする側に成長していった。このことから、ボランティアをする側とされる側の相互性に注目した。次に、心理学や他の分野

(哲学、社会学、比較行動学、社会福祉学、看護学)で論じられている相互性の概念を整理し、相互性を「支える人と支えられる人が交替しうる可能性」と定義した。そして、人間関係の深まりが相互性の時系列的な連鎖を生み、そのことが共生社会を形成していくと考察した(第6章)。

第3章「傾聴ボランティアとその養成」では、まず、傾聴ボランティアの歴史を概観した。傾聴ボランティアは、Evelyn Freeman がカリフォルニア州サンタモニカで、シニア・ピア・カウンセリング (senior peer counseling) として始めたのを契機に、村田久行氏によって日本各地でも展開されてきた。近年は、行政機関(自治体の福祉課や社会福祉協議会)が、健康な高齢者、退職した団塊の世代、主婦などを対象に、傾聴ボランティアを養成する講座(以下、養成講座と記す)を開いている。筆者は10箇所の行政機関で、14件の講座を実施してきた。これは、第2章の実際の行動学をモデルにし、講義と実習を組み合わせたプログラムであった。次に、その講座の成果と課題を評価するため、受講生85名・行政機関・実習機関に聞き取り調査を行った。その結果、ボランティアに消極的な人がいた一方、高いレベルで積極的にボランティアする人もいた。さらに、筆者が関わっている大学における認定傾聴士の養成について、その概要とカリキュラムを紹介した。そして、大学内の活動のみだけでなく、実習機関、地域の老人クラブ、すでに活躍している傾聴ボランティアなど、多くの力によって支えられた活動であることを考察した。

第4章「傾聴ボランティア経験が自己成長に与える効果」では、傾聴してもらうこと(話し手)の効果研究と、傾聴する側(聴き手)にもよい変化をもたらすという研究を整理したのち、第3章の傾聴ボランティア養成講座の受講者46名を対象に、傾聴感について調査した。傾聴感とは「どういうことか」という認識、どのような状態になったら「傾聴できたのか」に関する認識、さらに聴き手の「傾聴できた」という実感を指す。その結果、受講生の傾聴感とは「相手の話に耳・気持ち・心を傾け、聴くこと。また、相手との間に精神的なコミュニケーションが生じ、相手を受容すること」であると整理できた。さらに、傾聴ボランティア自身の内的な変化を示唆する受講生もいた。そこで次に、傾聴ボランティアの経験者7名に自由記述と半構造化面接を実施し、傾聴ボランティア自身がどのような自己成長を遂げているのかを検討した。KJ法で分類した結果、傾聴ボランティア経験の語りは、【外的成長】【内的成長】という2つの大カテゴリー、[I. コミュニティ意識の高揚][II. 人間関係の豊かさ][III. 傾聴スキルの向上][IV. 傾聴の深化][V. 自己の変化][VI. 精神的豊かさ]という6つの中カテゴリー、そして14の小カテゴリーで構成されていた。

第5章「傾聴体験がコミュニティ感覚に与える効果」では、まず、コミュニティ心理学の中心的概念の一つであるコミュニティ感覚 (sense of community: コミュニティに対する所属感)の研究を概観した。その定義や測定尺度は、Sarason (1974), McMillan & Chavis (1986), Jason, Stevens, & Ram (2015) で少しずつ異なっており、日本では、福島・鶴養 (2013) が「地域コミュニティに対する態度尺度」を作成していた。次に、大学生80名を対象に「地

域コミュニティに対する態度尺度」を実施し、第3章で述べた認定傾聴士の講義・実習における傾聴練習時間の効果を検討した。その結果、傾聴練習時間が多いほど、地域への愛着がわずかに上昇することが示唆された。すなわち、傾聴練習時間の多い学生は、既にボランティアとして実際に障害者・高齢者にかかわっており、このような実際の活動を通して、人びととの関係を肌で感じ、地域に対する愛着を形成したと考えられた。

第6章「総合考察」では、傾聴ボランティアの養成を、相互性の視点から考察した。本研究においては、傾聴する側（聴き手）と傾聴される側（話し手）は、どちらも高齢者であった。傾聴する側は、いずれ自分も高齢者となって、傾聴される側に移行することを意識したと思われる。傾聴ボランティアが、単に「傾聴する側-傾聴される側」という関係に留まらず、傾聴ボランティア自身の成長やコミュニティ感覚の高まりを通して、支える人と支えられる人の入れ替わる可能性（すなわち相互性）を意識したとき、それは新しい活動につながっていくだろう。実際に、傾聴ボランティアの活動は、「あんしん電話」や「ふれあいサロン」といった独自の活動に展開していることを紹介した。今後の課題として、本研究では、傾聴する側から傾聴される側に移行した人々への調査を実施していない。将来的には、このような調査によって相互性と臨床心理的地域「形成」の関連を、より精緻に描く必要がある。